

そんな律子を前に高鳴る俺の心臓はさつきから下半身にせつせと血液を送り込んでいた。手ぬぐいで隠してはいるのだが、その手ぬぐいを押しのけるようにして股間が主張している。

「はあ、始める前からそんなにしてどつするんですか…」
「あ、始めの時からそんなに見て、律子が大きいため息をつく。」

「いや、このところ忙しくてごぶさただし…それにいつもと違ったシチュエーションってのはやっぱり興奮するだろ。そういう律子こそ、もう準備万端！いつでもオツケー！って感じじゃないのか？」

「ばっ！馬鹿なこと言わないでください！」

「あ、あんまり大声だすなよ…隣の部屋だって露天風呂あるんだしさ…」

「う…すみません…」

「と、見せかけて…隙あり！」

律子に抱きつき、股の間に手を伸ばす。

「ちょ！きゃあ！やめてください！」

「…って本当ですか！」

「ほら、いつでもいいですよ」

むにゅっととませあげられた双丘に亀頭からペニスを沈めていく。

「うっ、はあ…」

つい情けない声が漏れてしまう。それくらいにやわらかい。

「こんなガチガチにしちゃって…。すごく熱いし…」

「そりゃ律子が胸でしてくるって言うんだから、ガチガチにもなるさ」

「しかしおっぱい好きですよなー、プロデューサーって。エッチのときはいつもおっぱいばかり触ってくるし…」

と言いながら両手で絞り上げるように胸を動かしてきた。

柔肉の刺激が背筋を走りぬける。

「くっ、ちょ、ちょっとそれ…よすぎ…」

「ん？気持ちいいんですか？」

「んー、どれどれ、ほらもうこんなに濡れてる」

「ひゃんっ！それはお湯ですっ！お湯！」

「おいおい本当にお湯かぁ？」

「お湯って言ったらお湯ですったら！」

手の甲を思いつきりつままれて、水中から引きずり出される。

「あたたた！っ、つねらなくてもいいじゃないか…」

「もっつ！雰囲気ぶち壊しなんだから…」

「す、すみませんでした…」

「そんなにしたいんだったら、早くお風呂済ませて部屋に入りましょ？」

「でもせっかくの個室露天風呂なんだからさ、このまましないか？」

「…風邪ひきますよ？」

そんなあなたの視線が一番冷たいです、風邪ひきそうです、律子さん。

「はあ…馬鹿は風邪ひかないっていいますし…いいですよ。おっぱいで一回してあげますから」

なるほど、それなら律子はお湯につかったままでも…。

なんて上目遣いで見上げてくる。

首を縦に振って返事をするのが精一杯だ。

「ほらほら、おっぱい気持ちいいでしょ？」

しゅっしゅとペニスをしごき上げるような動きに、一気に性感が高められていく。

マシユマロの中にペニスが溶けてなくなってしまったかのような感覚に陥る。

「ん、はっ！も、もう…！」

「もっ？久しぶりだからってなんか早すぎませんか？ちょっと待ってくださいいね…」

と、律子はペニスの根元をつかむと、亀頭を口に含む。

今までの胸のやわらかさとは違う、ぬるっとした生暖かい感触が亀頭を包む。

「だひてもいいですよ」

声の響きが限界を迎えたペニスに伝わってくる。

「でっ…出るっ！」

すでに絶頂寸前まで高められていた快感が律子の口内で一気に爆発する。

ペニスがビクビクと脈打ち、ポンプのように精液を吐